

ヒップホップとレゲトンにみる 黒人性とラティーノ性 Blackness and Latinidad in Hip Hop and Reggaeton ニューヨーク市のプエルトリコ系とドミニカ系 のバリオから In Case of Puerto Ricans and Dominicans in New York City Barrio

三吉美加
MIYOSHI Mika

1. はじめに

20世紀後半まで、ニューヨーク市でスペイン語圏カリブ海出身者といえ
ば、圧倒的にプエルトリコ系であった。しかし、1960年代の移民法改正¹や
「ニューヨークのカリブ化²」と呼ばれる社会現象を経て、現在にいたるま
で、メキシコや（カリブ海を含む）中南米から大勢の移民が流入し続けた結
果、市内のラティーノ³人口の構成は大きく変容してきた。そうしたなか、
もっとも目覚ましい人口増加を遂げたのは、ドミニカ共和国出身者たちで
あった。

現在、ニューヨーク市の人口のうち、ラティーノは約3割を占め、なかで
はプエルトリコ系がもっとも多く、次にドミニカ系となっている。1990年
代以降、マンハッタン島に関しては、ドミニカ系人口がプエルトリコ系を上
回っている。今やドミニカ系は、プエルトリコ系に並んで、ニューヨーク市
を代表するラティーノとなっている。

カリブ海で隣り合ったプエルトリコ島とイスパニョーラ島⁴は、コロンブ
スに「発見」されて以来、西欧諸国の植民地争いの舞台となった。以降、プ

エルトリコとドミニカ共和国は、(のちに米国も加わるが) それら列強による支配の経験を大いに共有してきた。長くスペインの植民地となった2つの場所では、日常生活をみても、スペイン語や食をはじめとする文化や習慣に多くの類似がみられる。両集団の文化や人の外見的な類似から、ニューヨーク市では、周囲の人がプエルトリコ系かドミニカ系かを尋ねているのを見かけるが、「見分けがつかない」というその示唆に、どちら側からも、しばしば不快感が示される。集団全体をみると、少なくともニューヨーク市の日常生活における両者の関係は、これまで決して良好なものであったとは言えない。

その一方で、比較的若い世代に関しては、互いの集団について寛容な態度を表す人が多い。その理由としては、マンハッタン島のバリオ(居住区)で、商業的な要素の強いポピュラーカルチャーやローカルな文化を通して育まれる、エスニック集団の枠組みを超えた、幅広い交友関係が指摘できる。本稿では、ニューヨーク市マンハッタン島で、ヒップホップやレゲトンなどに親しむプエルトリコ系とドミニカ系の人種化について考察してみる。

2. ニューヨーク市のプエルトリコ系とドミニカ系

(1) プエルトリコ系

カリブ海のプエルトリコは、米国の準州であり、プエルトリコ人は、生まれながらにして米国市民である。大陸部への移動にパスポートも査証も要らない。米国ラティーノ全体では、第2位の人口をもつプエルトリコ系だが、ニューヨーク市では、もっとも人口の多いラティーノ集団である。大陸部移住の歴史は古く、20世紀初頭に始まるが、大量の人びとがニューヨーク市マンハッタン島に押し寄せるようになったのは、1930年代以降であった。第二次世界大戦後から幾度かのピーク期を経て、現在も移住者の流入が続いている⁵。

現在、市内のプエルトリコ系人口は、約72万人である⁶。マンハッタン島でプエルトリコ系が集中しているとされるのは、古くからコミュニティのあるイーストハーレムやローワーイーストサイドなどである。しかし、高齢化

に伴い、ニューヨーク州郊外、フロリダ州やニューイングランドなどに転居する人が増加している。1990年代から、ニューヨーク市のプエルトリコ系人口は減少傾向にある。市内においても、プエルトリコ系の人口は拡散している。これまでプエルトリコ系コミュニティとして知られてきた場所には、ドミニカ系、メキシコ系、エクアドル系の流入が激しい。限られたエリアでまとまった数のプエルトリコ系世帯を見つけることは、容易ではなくなっている。

市内では、サービス業（主にホテルのメイド、レストランのウェイターや調理担当など）、アパレルや食品関係の製造業で就労する人が多い。1950年代以降、プエルトリコから未熟練労働者が高い割合で流入するようになるが、プエルトリコ系は、アフリカ系アメリカ人同様、米国社会のあらゆる場で差別を経験してきた。豊かな生活を求めて移住したにも関わらず、移住後の生活は、さらに過酷なものになるというケースが非常に多くみられた。今となっては容易に想像できないが、20世紀後半までスペイン語と英語のバイリンガルを有利とする考え方はあまり一般的なものではなく⁷、アクセント交じりに英語を話す人びとへの不寛容が、彼/女らの主流社会への同化を遅らせ、就労や教育を阻んできた。1950年代以降のニューヨーク市でのプエルトリコ系の急増は、「英語を話せないカリブ出身の黒人の増加」とされ、ときには、アフリカ系アメリカ人よりも「劣った」存在とみられた。こうした経験は、現在のドミニカ系やアフリカ系アメリカ人との関係を考える上で、非常に重要な点である。

(2) ドミニカ系

1960年代、ドミニカ共和国で、ラファエル・レオニーダス・トルヒージョによる独裁政権が終わると、民主的な選挙によってホアン・ボッシュが勝利を収め、左翼運動が盛り上がった。しかし、それまで利権を手に入れている保守派や「第二のキューバ」の出現を恐れた米国政府が手を組み、右翼による軍事クーデターが起こると、民衆の支持を得ていたボッシュが追放される。その後、トルヒージョ傘下にあったホアキン・バラゲールが政権を執ると、国内に高まっていた左翼運動の弾圧を強化し、死傷者を多数出す事態

が起こった。こうした政治の不安定は1970年代まで続くが、この間、政治的な理由でニューヨークに移住する人が増えた。また、同時期の1965年、米国の移民法改正や、ドミニカ共和国で貧富の差が拡大したことで、米国への移住を決意する人が増加した。これまでの移住の流れのなかで、もっとも大きなものは、1980年代から1990年代後半の間である。このピーク期では、経済的理由で移住してきた人が圧倒的多数である。初期の移民に比べて、ピーク期の移民たちの出身地や出身階層は多様化している。1961年から1986年までの間、合法的に40万人のドミニカ人が米国に入国している。

現在、ニューヨーク市には約58万人のドミニカ系がおり、市内ラティーノ人口の第2位となっている⁸。近年、これまで集中していた地区を離れるドミニカ系が増加傾向にあるが、依然、マンハッタン島北部に位置するワシントンハイツは、全米最大のドミニカ系コミュニティとして知られている⁹。街には、スペイン語が飛び交い、メレンゲやバチャータなどドミニカ音楽があちらこちらの店先から聞こえてくる。ワシントンハイツには、ドミニカ系が経営するレストラン、CDショップ、美容院、洋品店、ボデガ（キオスク）、送金屋など小規模の店が立ち並び、ストリートの脇では、手作りのケーキや家庭料理を売る人びとが、主にドミニカ系住民を相手に忙しく商売している姿がみかけられる。

メキシコや中南米出身のスペイン語話者への偏見が今よりも強かった時代、主流社会に同化することでしか社会的地位を上げられなかったプエルトリコ系コミュニティと比較してみると、現在見るようなドミニカ系コミュニティの在り様はドミニカ系が米国で比較的新しい集団であることを思い出させる。ドミニカ色溢れるワシントンハイツは、公民権運動や多文化主義についての議論が活発化した時代を経て1980年代以降に急成長してきた。

ドミニカ系の場合も、プエルトリコ系と同様、市内のホテル、レストランなどでのサービス業や工場労働に従事する人が多い。とくに、多くの女性がこれまで縫製工場で働いてきた。組合のない、低賃金の仕事に就く人の割合が非常に高い。その一方、ドミニカ系コミュニティのなかに目を向けると、ドミニカ系経営のビジネスが同地区の住民を多く雇用している。コミュニティ内部をみる限り、貧困率が市内でもっとも高い集団の1つであるとは信

じがたいほど、活発な経済活動が行われている。

(3) プエルトリコ系とドミニカ系の人種観

概して、プエルトリコ系もドミニカ系も、自身の集団に「黒人はいない」（本稿での「黒人」は、広義に米国社会で「黒人」とみなされる人びとのことをいう）、あるいは「極少数に限られる」と考えている。また、自らが黒人であると認める人は、意外なほどに少ない¹⁰。プエルトリコ系は、「ドミニカ系には黒人が多い」とするが、ほとんどのドミニカ系は、その意見に反発する。逆に、ドミニカ系の間では、プエルトリコ系を「スペイン語を話さない」「白人だと思っている人が多い」と揶揄する傾向がある。確かに、プエルトリコ系はドミニカ系に比べ、集団全体でみると、スペイン語を話さず、英語で生活する人が多い。しかし、それは、プエルトリコ系に対する差別の歴史と関係している。つまり、深刻な差別のなか、プエルトリコ系であることを周囲にしらしめるスペイン語の使用を、子に控えさせることによって、子世代の主流社会への同化を促進するという戦略を、多くのプエルトリコ系が採ってきたことをそれは反映している。

CIA のザ・ワールド・ファクトブックによると、プエルトリコでは、白人 76.2%、黒人 6.9%、混血 4.4%、ドミニカ共和国では、混血 73%、黒人 11%、白人 16%となっている¹¹。プエルトリコでは、白人が高い割合を占めるが、ドミニカ共和国では、米国社会においては「黒人」と判断される人の割合が 8 割以上となる（一滴血統主義の伝統が根強い米国では、カリブ海社会では一つの人種分類と扱われる「混血」区分が「黒人」区分に含まれる）。2000 年度の国勢調査によると、プエルトリコの人びとの 81% が自らを白人としており、フロリダ州のプエルトリコ系では 67%、ニューヨーク州では 45%となっている。厳密には、大陸部に移住した人びと全体の「客観的な」人種構成をみる必要があるが、長い移住の歴史のなかであらゆる階層からの移住者が多くいることと、これほどの数字の低下がみられることから、ひとまず、米国社会の人種分類の受け入れがあったと理解できよう。一方、米国のドミニカ系の場合では、22%が白人、59%が他の人種（白人でも黒人でもない）、8.2%が黒人、としている¹²。米国において比較的新しい集団であ

る点を考慮すると、今後数字が大きく変化していくことが推測されるが、黒人と認めたがらない傾向がドミニカ系にあることは明かだといっただろう¹³。

人種に関する自己と他者の認識のずれによって、とりわけ、多くのドミニカ系移民一世の間で自己認識の混乱が起こっている¹⁴。彼/女らにとって好ましくない「黒人」という周囲の認識に対して、「ラティーノ」「ヒスパニック」「ドミニカ系」などと本来は人種分類でない区分を提示し、相手の「誤り」を訂正する行為がみられる。

3. バリオとヒップホップ

(1) バリオ

バリオは、スペイン語で「居住区」という意味であるが、ニューヨーク市では、たいてい、プエルトリコ系やドミニカ系が多く住む地区のことを指す。マンハッタン島最大規模のバリオ、ドミニカ系コミュニティのワシントンハイツには、住人約20万人がおり、その約7割がラティーノで、約5割(約10万人)がドミニカ系、次に多いプエルトリコ系は全体の約8%(約2万人弱)となっている¹⁵。

若い人びとに注目する際、ワシントンハイツに加えて、隣接地区ハーレムやイーストハーレム、ハーレム川を隔てたブロンクス区とともに彼/女らの活動範囲をみていく必要がある。以降、本稿では、ワシントンハイツ、ハーレム、イーストハーレム、サウスブロンクスの4地区を「バリオ」と呼ぶ¹⁶。若い人びとにとってバリオは、学校、友人宅、バイト先などがある生活圏である。重要なのは、ヒップホップとの関わりにおいて、これら4地区は1つの空間と考えられていることである。ワシントンハイツ内では、ドミニカ系が圧倒的に多いものの、4地区内には、プエルトリコ系やアフリカ系アメリカ人、他のカリブ系をはじめとする多様なエスニック集団が居住している。

(2) ヒップホップ

1970年代、ニューヨーク市の都市開発によって、住み慣れた居住地区を

追い出された多くのラティーノ、カリブ系、アフリカ系アメリカ人、一部のユダヤ系などがサウスブロンクスの「プロジェクト」と呼ばれる市営アパートに転居を迫られた。新しい移住者の集まる場所で、時間をもてあます若者たちは、他のエスニック集団の若者と反目し合うと同時に、実は、互いのエスニック文化に馴染んでもいった。それぞれの集団からもたらされた娯楽のスタイルが、他のエスニック集団の若者の間でも受け入れられ、少しずつスタイルや内容が変化していった。なかでも、当時ジャマイカのダンスホールで流行していた、音やビートに合わせて、しゃべりを入れていく遊び（トースティング、チャティング）は、若者間で人気を博していった。それは、ジャマイカ系や他の西インド諸島系の若者によって広められた。

当時、ゴミ捨て場と化していた地区の一区画から拾ってきたり、音楽業界で働く人に頼んで集められてきた、使い古しのターンテーブル、レコード、マイク、スピーカーなどが再利用され、空地や放置されたアパートの一室に集まる若者が、マイクを手に、バリオでの生活経験を自らの言葉にしていく。そうして紡ぎだされる言葉に、周囲の若者が共感を示す。このような遊びの延長線上で、のちにヒップホップと呼ばれる文化活動が興った。その活動の中心には、アフリカ系アメリカ人、プエルトリコ系、ジャマイカ系、バルバドス系、ドミニカ系、トリニダード系、トバゴ系など多くのカリブ系を含む黒人たちがいた¹⁷。若者が集まる場で、自らのバリオへの想いをビートに合わせて「しゃべる」というパフォーマンスは、いまでもバリオのストリートやパーティーなどで広く親しまれている遊びのスタイルである。

(3) ヒップホップとレゲトンへの親しみ

バリオの若い世代の間では、ヒップホップやレゲトン¹⁸が娯楽の中心にある。ヒップホップとの関わりは、先に述べたような、地元ですでに根付いているローカルな（あまり商業ベースではない）ヒップホップの遊びのスタイルに幼いころから親しんでいることがある。また、彼/女らは、商業ベースのヒップホップやレゲトンの影響下にもある。とくに、中学生から大学生くらいの若者たちは、リアーナやクリス・ブラウンなど世界的に知名度のあるアーティストの歌やファッションを友人との共通の話題にし、人との関係

を作っている。

普段、友人との会話のなかでも、誰と踊りにいくか、どこのクラブがよいか、と話が盛り上がる。平日は、好きな音楽を聴いて、誰かの家やストリートでダンスの振りつけを練習する。そして、週末が来ると、流行の服装や髪型をして、クラブやパーティーへ出かけ、平日に練習したダンスの振りつけを人前で披露する。プエルトリコ系もドミニカ系も、幼少のころから、サルサ、メレンゲ、パチャータなどを普段から踊っているため、大勢のなかで踊ることに抵抗感が示されることはない。ダンスがある空間は、人との関係を深める場であり、新しい友人、ボーイフレンドやガールフレンドを探す出会いの場として、もっとも重要視される日常空間となっている。こうした場は、エスニシティを超えた人づきあいが深まる場でもある。バリオにおいては、ドミニカ系とプエルトリコ系の出会いの場になる確率が非常に高くなる。音楽やダンスに関する嗜好性を共有していることは、その場にいることですでに明らかとなっている。そうした場でもとに歌い、踊り、声を掛け合うことで、出会った当初から前提とされる、ある程度の仲間意識が急速に強まっていく。

ヒップホップに並んで、レゲトン（現在、大人気となっているドミニカン・デンボウ Dem Bow も含む）は、とくにラティーノたちを中心に人気が高い。レゲトンは、1990年代後半頃に、米国のヒップホップ、パナマのスペイン語レゲエ、プエルトリコの伝統音楽などスペイン語圏カリブ海都市部を中心に、流行していた音楽を混成したものと考えられている。スペイン語圏カリブ海出身や米国ラティーノのアーティストが多く、スペイン語やスパンダリッシュ（英語とスペイン語を混ぜ合わせた言語）が主な使用言語である。性的なニュアンスを非常に強く出した、男女ペアで踊るダンスは、その場に居合わせた、限られた仲間との親密性やセクシュアリティのダイナミズムを大いに感じさせる。ヒップホップダンスでは、他との身体接触なしに、個々に踊られる場合が多いが、バリオのレゲトンでは、まず踊る相手を探して、相手と呼吸を合わせながら身体を動かすというスタイルが流行している。サルサ、メレンゲ、パチャータなどのダンスに慣れたプエルトリコ系やドミニカ系にとっては、ラティーノであること、あるいは、プエルトリコ系、ドミ

ニカ系としてのエスニック背景を際立たせるツールにもなっているダンスであるといってもよいだろう。実際、若者が踊っている姿をみると、プエルトリコ系、ドミニカ系、それぞれの集団で親しまれているダンスの振り付けを思い出させるような身体の動きが見受けられる。したがって、ヒップホップからレゲトンに音楽が変わるとき、それまで一緒に踊っていたラティーノとアフリカ系アメリカ人との間に、線が引かれるような瞬間が生じることもある。レゲトンは、ラティーノ性やアフロラティーノ性と深くかかわる音楽・ダンスである。

クラブで、ラップやレゲトンのビートに身体を揺らす若者たちは、ともにうたい、サビの部分ではパフォーマーと声を合わせたり、即興でメッセージをステージに返す。相互参加型のパフォーマンスは、ヒップホップやレゲトンにおいて必須である。パーティーでは、パフォーマーやDJが「ブラック」「モレーノ（スペイン語で「黒人」）」「プエルトリコ系」「ドミニカ系」と集まった人に呼びかける。多エスニックであるが、みな黒人である観衆は、それに応えながら、さらに盛り上がりを見せていく。地元のアーティストのライブでは、パフォーマンスや「しゃべり」のなかで、地元への愛着や黒人としての誇りが示される。この特徴は、ローカルなヒップホップと商業ベースのものとの違いを明確にしている。

バリオの若者は、商業ベースのヒップホップにも、ローカルなヒップホップにも親しむが、高校生以上の若者になると、年齢制限のあるクラブやパーティーに通う機会が増えることで、ローカルな（地元密着型の）ヒップホップに傾倒していく人が多くなる。したがって、バリオの若者の間では、年長者になるほど、黒人としての意識がより強くなる。プエルトリコ系とドミニカ系の場合、娯楽を通して、黒人であることの「格好よさ」やメディアにみる黒人の表象の「わかりやすさ」にも影響を受けながら、黒人性と自身とを関連づけていく。このことは、生まれてから重要視されてきたエスニシティにまつわるアイデンティティとは少し距離が置かれるようになることを意味する。人種的アイデンティティにまつわる共通項が見出されることで、2つの集団の若者の間には、親密な友人関係がみられるようになる。

フローレスは、ニューヨークの若いプエルトリコ系が、プエルトリコの伝

統音楽とヒップホップの文化領域を利用しながら、エスニシティにもとづくアイデンティティを構築している、と指摘している¹⁹。ドミニカ系も同様に、ヒップホップ、ドミニカン・デンボウ、メレンハウス（メレンゲとハウスをミックスさせた音楽ジャンル）、パチャータなどが流れる音楽空間では、集まった多種のラティーノ集団のなかで、エスニック的アイデンティティへの愛着を示すように、それらの音楽について他のエスニック集団の友人に詳しく語ってみせたり、ダンスステップを教えたりしている²⁰。しかし、ニューヨーク市のバリオに生まれ、多文化な学校やストリートなどでしたたかに生活する彼/女らにとって、エスニシティを最重要視するだけでは不十分である。大人以上に、より多文化的状況に開かれた日常生活をしている彼/女らにとっては、さまざまな場を「クール」に切り抜ける多様なアイデンティティ、つまり、他のエスニック集団とのつながりや差異を意識させる、汎用性の高い、複数のアイデンティティが重要になってくる。このことは、学校やバイト先、クラブやストリートで培われる人間関係において、ポピュラーカルチャーが重要な紐帯となっている彼/女らの状況を照射する。

4. 相互補完的な黒人性とラティーノ性

(1) 深められるバリオと黒人性との関連

ヒップホップを通して知り合った友人や若者対象のプログラムを提供する NGO で働く人びとと交流するなかで、若者たちのなかには、黒人やプエルトリコ系が中心となった（一部ドミニカ系も含まれる）公民権運動に関心をもつようになる人もいる。バリオ内の大学が主催するイベントでは、バリオが直面する問題が明示され、コミュニティのリーダーたちを招いて、それらの対策について話し合いの場がもたれる。こうした場では、頻繁に、1960年代および1970年代に活発化した公民権運動や市民運動についての言及がされる。たとえば、当時「ヤングローズ（Young Lords）」というプエルトリコ系を中心とする組織があったが、バリオの住人に向けた医療設備の充実、教会や小学校での食事の提供、子どもの結核や喘息対策など、市行政に多くの働きかけを行ったことに話が及ぶ²¹。

ローカルなヒップホップのパフォーマンスにおいても、黒人公民権運動について言及がされるが（ラティーノが先導した公民権運動についてはあまり触れられない）、住民たちから直接聞くバリオの過去についての話によって、若者たちは、いまバリオにいる自分と過去とを結び付けようとする。バリオの過去について、（白人中心主義的）主流社会との闘いであった、という認識は、プエルトリコ系とドミニカ系のアフリカ系アメリカ人への強い共感やバリオへの愛着となっている。プエルトリコ系の高校生は、次のように語った。

プエルトリコ系もドミニカ系も文化が同じだし、ブラック（アフリカ系アメリカ人）とラティーノはずっとここ（バリオ）で一緒だったんだから、われわれブラザーとシスターはずっと仲良くしていかななくてはならない。

ヤングローズの活動した時期は、ヒップホップの創成期にあたるが、とくにサウスブロンクスでは、この頃、ギャング抗争が激化し、ラティーノや黒人の若者の間に大勢、死傷者を出していた。そのなかで、ヒップホップ活動を率いていたアフリカ・バンバータ、グランドマスター・カズ、クール・ハルク（ジャマイカ系）などが、地区の若者に「銃やギャング抗争をやめろ！踊れ！」と積極的に呼びかけていった²²。当時、マンハッタン島北部やサウスブロンクスでは、悪徳な不動産業者により放火され、その後、放置されたアパートメントビルが多くあった。ヒップホップ活動のリーダーたちは、若者たちにそうした場所を利用して、「平和的に」集う場を作るように提案した。新しい社交の場となったアパートメントの一室では、踊りによって、反目しあう若者のエネルギーを発散させるために、ヒップホップのダンスパーティーが開催された。それは、他エスニック集団に寛容でない若い世代を、音楽とダンスの力で一つにし、彼らの暴力的な競争を非暴力的なものへ転化しよう、という初期のヒップホップアーティストらによる試みであった。この過程において、独自性や創造性に溢れたダンスに、バリオ内では高い社会的ステイタスが与えられるようになっていく。また、「敵」と張り合うためには、銃ではなく、独自の価値観や美感覚によるオリジナルなスタイルが重

要であるという思考が、リーダーたちへの尊敬とともに、周囲の若者の間で共有されるようになっていった²³。

ヤングローズやヒップホップ創成期に中心となっていた人びとによるバリオの「歴史」についての語りは、世代間のつながりを深めている。とくに、年長者が年下の面倒をみるという伝統的な習慣のあるプエルトリコ系やドミニカ系の間では、地区のリーダーたちと親しく関わる若者たちが多く、ドミニカ系の高校生は、親しくなったリーダーから1980年代のバリオやその時のヒップホップの様子について聞き、「ヒップホップはニューヨークで生まれて、ラティーノとブラック（アフリカ系アメリカ人）が中心でやっていてって漠然と知っていたけど、トニ（NPOのリーダー）から話を聞いて、具体的なことがいろいろわかってよかった。ラティーノはみんな仲良くしなくてはならない」と語った。「ラティーノ」は、ここではプエルトリコ系とドミニカ系のことである。

友人関係に年齢的な厚みがでることで、若者たちがそれまで関わってきたヒップホップやレゲトンに以前よりも深い考察がもたらされる。当然、そこでは黒人やラティーノとの関連で、ヒップホップやレゲトンが捉えられていく。NPOのリーダーとの関係においても、ヒップホップやレゲトンは重要な紐帯的役割を果たしている。彼/彼女の会話のなかで話題となるのは、音楽やダンスであり、パーティーイベントでは一緒に踊ることで関係性が深められていく。

(2) 黒人性とラティーノ性

ヒップホップのなかでも、近年スパングリッシュやスペイン語のラップが増加傾向にある²⁴。メジャーデビューを果たしているプエルトリコ系やドミニカ系のラッパーも数多い。フローレスは、最近のラップにレゲエの要素が濃くなっており、アフリカ系アメリカ人による英語のリリックスのなかにスペイン語が使用されていることを指摘しながら、ラップでは、さまざまな文化要素が融合し、たえず文化的な交渉や取引が行われていると述べている²⁵。アフリカ系アメリカ人や英語圏カリブ系も居合わせるバリオにおいて、スペイン語やスパングリッシュの使用が象徴するのはラティーノのアイデンティ

ティであり、誇りである。同様に、レゲトンにおいても、ニューヨーク市のカリブ系ラティーノの経験を表現するように、プエルトリコ系やドミニカ系の存在を意識した言葉や音楽性を混ぜた曲が目立つ。フォーマンは、「ラップは人種、エスニシティ、若者などを分類項目とする（米国の）社会的な空間を形成する」²⁶と言及するが、バリオの場合、人種に関しては、黒人と（本来は、人種分類ではないが）ラティーノ、エスニシティに関しては、ドミニカ系とプエルトリコ系を分類項目に、社会的な空間が形成されている。まず「この場所は我ら黒人たちのヒップホップ空間である」とした上で、「アフロラティーノ²⁷」「アフロカリブ系」「アフロプエルトリコ系」「アフロドミニカ系」など人種化したエスニシティ区分で自己を認識している。この認識は、黒人の間やラティーノの間での結束力を確認しあうために利用されるだけでなく、個人の自尊心を高めるものにもなっている。

文化的アイデンティティは私たち自身のために用意されるものではなく、他に向けてのパフォーマンスとして、あるいは、他者との交渉のためのものである。私たちは文化のスーパーマーケットのなかで自分の社会的世界を意識し、自身（のアイデンティティ）を選んでいく。ある人の文化的アイデンティティは、他者を説得するためのパフォーマンスとなっている²⁸。

バリオを中心にライブ活動をする地元のアーティストは、「ブラック」や「モレーノ」であることを主張したり、「ラティーノであることを誇りに思う」と、観衆に向かって大声で叫ぶ。観衆たちもそれに応えてさらに大きな声で叫ぶ。そして、「プエルトリコ系」「ドミニカ系」とそれぞれ呼びかけ、最後に「我々是一つだ」とコール・アンド・レスポンスで完結する。

5. おわりに

日常生活のなかで愛好しているヒップホップやレゲトンの音楽やダンスを介して、黒人であり、ラティーノである自分を意識するようになり、その過程で、プエルトリコ系もドミニカ系も人種的アイデンティティを共有してい

く。一方、両者の友人関係においては、エスニシティの重要性も再び理解されるが、その際、アフロラティーノ、アフロプエルトリコ系、アフロドミニカ系と人種的な指標がともに提示されることが多くなっている²⁹。

現在、ニューヨーク市の2大ラティーノ集団となっているプエルトリコ系やドミニカ系の間では、ドミニカ音楽のメレンゲ、バチャータ、パロ（アフリカの要素が強い）、また、プエルトリコ音楽でアフリカの要素の強いプレーナやボンバなどの要素を取り入れた商業ベースの音楽が人気を得ている。このような人気は、まずヒップホップやレゲトンの人気なくしては見られなかったのではないかと筆者は思う。つまり、両ラティーノ集団の若い人たちが自らを黒人でもあると認め、強く愛着を感じることを前提に、伝統文化（とくに黒人性を感じさせるもの）が見出され、価値づけられているのではないだろうか。それぞれの集団全体では、依然、黒人性を感じさせる音楽やダンスが無視され続けているなかで、若い人びとの間でみられるこうした独自の価値づけの傾向は非常に興味深いものである。

エスニシティや人種に関する自己認識は、人との出会い、生活経験を通してもたらされる。プエルトリコ系やドミニカ系にとって、黒人の表象は、普段「黒人とみられる」彼/女らにとっては非常に取り入れやすいものだといえる。社会に根強い白黒の二元論的認識や若者を対象とした消費文化における黒人の表象などはその傾向を後押しする。バリオの外に出ると、人種差別を痛感するという若者たちの発言と合わせてみても、自らの帰属先を黒人集団に求めていくことは当然であろう。アパドゥライは、イメージを直接的に提供し、生の可能性に具体的な道筋を与えているという理由からメディアが重要であると述べ、メディアには（与えられた情報の）記号を（受け手に）解釈させたり、それらを分別させたりする大きな力があり、個人はやがていろいろな手段によってもたらされたメトロポリタン的世界と社会的なつながりをもつことになる、という³⁰。

「黒人になる」ことで、バリオのヒップホップ的空間においては自らが中心的アクターになる。同時に、それはエスニック・アイデンティティやラティーノとしての意識の向上にもつながる。米国の多文化主義を特徴づける社会現象として、自己の固有文化や価値を謳う際、該当する人びとが共有す

る過去の経験、記憶といった歴史が重要な要素となるが³¹、プエルトリコ系およびドミニカ系の若者の場合では、アフリカ系アメリカ人や他のカリブ系らとともに、同じ黒人であることを示したいときには、アメリカ大陸における奴隷制度から公民権運動、あらゆる形をとる非白人に対する差別的扱いなどについて、若者が中心となる場で言及しあっている。

米国では、1980年代後半以降、多文化主義をめぐる議論が活発化した。1960年代以来、黒人、カリブ系、ラティーノのコミュニティでは、それぞれ独自の文化実践やその価値を主張し、主流社会に自集団/文化の認識を要求する運動が興った。しかし、公的な領域、とくに政治や教育現場において、国民が共有する文化を学習しなくてはならない、とする主張は（とりわけ文化多元主義者たちの間で）根強い。アフリカ系アメリカ人、ラティーノ、カリブ系などの人びとの公（学校、職場など）と私（家庭、居住地区など）の領域における文化実践や価値観はいまもなお不連続であり、異なった2つ以上の文化体系に彼/女らが親しまなくては公的な領域において良い評価が得られないという現実が変わっていない。マイノリティは、依然、居住区のなかで馴染みが薄い主流文化（中流のWASP的価値観）の受容を強いられている。ハーレムの公立高校で教える南米出身の教師は、「ラティーノの若者は、気がつけば、学校に通い始めてからずっと白人の女性教師ばかりで、自分たちの文化が（教師に）理解されていないし、下に（価値の劣るものとして）みられている、と感じている」と語る。バリオにおけるヒップホップやレゲトンの絶大な人気は、学校やバリオ外における彼/女らの人種やエスニック背景に関する無関心を反映しているのだろうか。

本稿は、「アメリカの社会とポピュラーカルチャー研究会」における発表をもとにして書いたものである。本テーマについて、さらに深く研究していくためには、プエルトリコ系とドミニカ系各集団内でのアフロラティーノ化にみる差異や若者の今後について、長期的なフィールドワークをもとにした考察が必要である。また、ヒップホップやレゲトンのリリックスやダンスにおけるジェンダーやセクシュアリティについても、男女の経験差に注意しながら、検討していかなくてはならないだろう。筆者の今後の課題としたい。

註

1. 米国民や永住権保有者の家族にビザが優先的に与えられるようになった。
2. ニューヨーク市へ大勢のカリブ海島嶼出身者が流入し、社会的文化的に大きな影響を及ぼした。
3. ラティーノは、基本的に、メキシコおよびカリブ海を含む中南米スペイン語圏から来た人、その子孫を意味する。ラティーノは、人種分類ではない。世俗的なレベルでは、大きなエスニック分類の括りとして米国では考えられているが、人種分類のように使われることも多い。たとえば、「あの人は黒人か?」という問いに、「いえ、ラティーノだ」といった会話がされる。
4. ドミニカ共和国は、イスパニョーラ島に位置している。島の西3分の1には、ハイチ共和国がある。
5. プエルトリコ系の場合もドミニカ系の場合も、ニューヨーク市内の雇用や生活環境の悪化により、カリブ海へ戻る人が多い。景気の改善など、ニューヨーク市での生活に利点が見出されると再び移住がもたらされる。
6. Department of City Planning, City of New York [2012]。
7. この背景には、メキシコ系やプエルトリコ系を主とするラティーノに対する蔑視がある。
8. Department of City Planning, City of New York [2012]。ドミニカ系に多くの非合法移民やその子孫がいると考えられるため、実際の数をはるかに上回るとみられる。
9. ワシントンハイツからの人口流入の結果、現在、全米でもっとも多くドミニカ系が居住するのは、ニューヨーク市ブロンクス区である。
10. ドミニカ系が黒人と自らを認めがらないことについては、ドミニカ共和国の歴史のなかで、世界初の黒人共和国ハイチによるサントドミンゴの侵略やラファエル・トルヒージョ独裁政権下での反ハイチ（反黒人）政策によるところが大きい。ハイチ人や黒人を卑しめつつ、自らの国民がヨーロッパ系である点を強調しながら、国民国家意識が形成されてきた。
11. CIA THE WORLD FACTBOOK 参照。
12. Rumbaut [2011]。
13. ドミニカ共和国の人種比率が米国内でのドミニカ系の人種比率と一致しているわけではないが、大まかな傾向性はみてとれるといってもよいだろう。
14. 三吉 [2006]。
15. Department of City Planning, City of New York [2012]。続いてメキシコ系（6%）、エクアドル系（3%）となっている。
16. 「エル・バリオ」といえば、プエルトリコ系をはじめとするラティーノによるイーストハーレムの愛称である。

17. Rivera [2001]、Rose [1994]。
18. ヒップホップやレゲトンと同時に、レゲエ、R & B、ハウスなどは、ともに親しまれるものであるが、本稿では、それらを代表して「ヒップホップ」と「レゲトン」について述べている。
19. Flores [2000]。
20. 三吉 [2006]。
21. 教会での立てこもり事件を起こしたこともある。
22. DVD “From Mambo To Hip Hop: A South Bronx Tale” Director: Henry Chalfant. (2008) にその様子は詳しい。
23. 銃がバリオオから少なくなったとは、到底言えない状況ではあったが、ヒップホップの活動が盛んになったことで、若者の関心は、少なからず、ギャングではなく、音楽やダンス、グラフィティ、ラップなどに向かっていたことは明らかである。
24. スペイン語のラップは1990年代に広く人気を得るようになった。
25. Flores [2000: 138]。
26. Forman [2000: 66]。
27. もちろん、必ずしも協調的な連帯感ではなく、ときにはライバル意識を露わにした関係性もみられる。
28. Mathews [2000: 22]。
29. Rivera [2011]。
30. Appadurai [1996: 53]。
31. 辻内 [2001: 9]。

参考文献

- Appadurai, Arjun. *Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalization*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 1996.
- “CIA The World Factbook” 2013年2月28日閲覧。
 < <https://www.cia.gov/library/publications/the-world-factbook/index.html> >
- Department of City Planning, City of New York. “Community District Needs: Fiscal Year 2013.” Spring 2012. 2013年1月20日閲覧。
 < http://www.nyc.gov/html/dcp/pdf/pub/mnneeds_2013.pdf >

- Flores, Juan. *From Bomba to Hip-Hop: Puerto Rican Culture and Latino Identity*. New York: Columbia University Press, 2000.
- Forman, Murray Y. " 'Represent' : Race, Space, and Place in Rap Music." *Popular Music* 19.1 (2000): pp. 65-90.
- Mathews, Gordon. *Global Culture/Individual Identity: Searching for Home in the Cultural Supermarket*. London: Routledge, 2000.
- 三吉美加「身体をめぐるアイデンティティの構築——ニューヨークにおけるドミニカ系2世のダンス実践から」博士論文（東京大学大学院総合文化研究科），2006年．
- Rivera, Petra R. " 'Tropical Mix' : Afro-Latino Space and Notch's Reggaetón." *Popular Music and Society* 34.2 (2011): pp. 221-235.
- Rivera, Raquel. "Hip-Hop, Puerto Ricans, and Ethnoracial Identities in New York." *Mambo Montage: the Latinization of New York*. Eds. Agustín Laó-Montes and Arlene M Dávila. New York: Columbia University Press, 2001.
- Rose, Tricia. "A Style Nobody Can Deal With: Politics, Style and the Postindustrial City in Hip Hop." *Microphone Fiends: Youth Music and Youth Culture*. Eds. Andrew Ross and Tricia Rose. London: Routledge, 1994.
- Rumbaut, Rubén G. "Pigments of Our Imagination: The Racialization of the Hispanic-Latino Category." *Migration Information Source*, April 2011. 2013年2月9日閲覧
< <http://www.migrationinformation.org/usfocus/display.cfm?ID=837> >
- 辻内鏡人『現代アメリカの政治文化——多文化主義とポストコロニアリズムの交錯』ミネルヴァ書房，2001年．